

■月刊「OISCA」12月号付録 ■通巻662号 ■平成30年12月1日印刷 ■平成30年7月5日発行

よみがえれ！海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10カ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。

Vol.4



オイスカの担当者はヘリから見た宮城県石巻市の姿に息をのんだ(2011年4月21日)

9名、19日6名……震災のあと、宮城県名取市の北釜地区で消防団の責任者を務めた森清さん(64歳)は現地安置所に通った。身元が分かれば、棺の番号を家族に伝える。確認される遺体はだんだん減っていく。半月ほどたつと何日かに一人になった。それでも、5月25日に51人の犠牲者を見つけるまで、毎日この作業を続けた。

いつだれがどこで確認されたのか。森さんが記したメモが残っている。津波は市境など関係なく人を流してしまったのに、名取市民の森さんは最初、岩沼の安置所には入れなかつた。「行方不明者届出表」を毎日提出し、岩沼でも20近い北釜の人々の亡骸を確認した。名取ではきちんと死に化粧が施されていてが、岩沼ではそこまで手が回っていないよううにみえたことを覚えているという。

ことしの9月、東日本大震災の津波に巻き込まれて死亡した95人が、名取ではきちんと死に化粧が施されていてが、岩沼ではそこまで手が回っていないよううにみえたことを覚えているという。

一方に、家族や友人を亡くし、あるいはその行方も分からぬまま、生業の農業を再開することもできず、避難所で不自由な生活を送る被災者がいた。もう一方に、復興にどんな形でかかわられるのか、ふとした思いつきを実現しようするNGO(非政府組織)があった。両者が「海岸林再生」という共通の目標に向かって踏み切るまでの、助走の時期に触れておきたい。



現場では自衛隊や警察、消防に地元も協力して搜索活動が続いた(2011年3月22日／名取市消防本部撮影)

彼がここまで 言つなら

同じ13日の日曜日、名取か

らは300kmほど離れた東京・昭島市で少年野球チームが練習をしていた。オイスカの現海岸林担当部長、吉田俊さん(49)は、当時の生活は少年野球を中心にしてが回っていたというほど、自身の子供もメンバーになっていたチームの手伝いに夢中だった。

内陸側の名取第二中学校の体育館に避難した北釜の人たちは2日後の3月13日(日)、生活が2ヵ月半ほど続くのだが、地域をよく知っているだけなく消防団員の仲間を失つたこともあって、森さんは避難所から遺体安置所に通り、消防団と一緒に捜索活動にもあたった。

医者だつていい。水をかぶつた人には低体温が一番致命的だったかもしない」。

空港に避難した北釜の人たちは2日後の3月13日(日)、内陸側の名取第二中学校の体育館に移った。そこで避難生活が2ヵ月半ほど続くのだが、地域をよく知っているだけなく消防団員の仲間を失つたこともあって、森さんは避難所から遺体安置所に通り、消防団と一緒に捜索活動にもあたった。

同じ13日の日曜日、名取からは300kmほど離れた東京・昭島市で少年野球チームが練習をしていた。オイスカの現海岸林担当部長、吉田俊さん(49)は、当時の生活は少年野球を中心にしてが回っていたというほど、自身の子供もメンバーになっていたチームの手伝いに夢中だった。

吉田さんは神奈川県相模原市出身。高校卒業後の浪人中は予備校に通つても早々と辞め、実家も出て、朝晩3種類のアルバイトをしながら自己活した。夜のバイト先の寿司職人の夫婦に諭されてあらた

た。彼が休憩中、タバコを吸いながらふと思いついたことがあった。その日のうち、思いつきを伝えるため林野庁東北森林管理局(秋田)の知人に電話した。知人は日本海側から太平洋側へ、燃料などの支援物資を届けるトラックの中にいた。「海沿いのマツは保安林だから、失われても再生しなければならない。その事業にオイスカが協力できないか、といふ提案である。「なぜそんなことを思いついたのか、今も分からぬ」と言うが、この思いつきがすべてのはじまりだった。

保安林というのは、風や飛砂を防いだり水源を守つたりするための森林で、国や都道府県が指定する。海岸林も生活になくてはならぬ保安林だから、失われても再生しなければならない。その事業にオイスカが協力できないか、といふ提案である。「なぜそんなことを思いついたのか、今も分からぬ」と言うが、この思いつきがすべてのはじまりだった。

吉田さんは神奈川県相模原市出身。高校卒業後の浪人中は予備校に通つても早々と辞め、実家も出て、朝晩3種類のアルバイトをしながら自己活した。夜のバイト先の寿司職人の夫婦に諭されてあらた

めて大学を目指し、二浪して東京経済大学へ。大学でもバイトで毎月20万円以上稼ぎつつ、軟式庭球に打ち込んだ。それだけでなく、29の運動部、総勢900人を束ねる体育会の自治組織のトップに就いて、当時は当たり前だった部員の学ラン(詰襟の学生服)での登校義務を、OBの反対を押し切つて廃止する「改革」を成し遂げた。

国際協力に興味を持ったのは中学時代に見たNHKドラマ「炎熱商人」(原作・深田祐介)がきっかけ。オイスカではプロジェクトの現場にどっぷりつかるというより、プロジェクトと企業の橋渡しをして資金を集めること得意として資金を集め仕事を得意としていたという。いわば「営業」。しかし、上司との意見の違いや現場への関心からいたたんオイスカを辞めて林業会社に転職、2年後に戻ってきたのが震災1年前の2009年秋だった。

いろいろな経験をした。1995年の阪神・淡路大震災はオイスカに入つて1年目。発生一週間後、神奈川県の自宅にいると、父親に「正座してお前はなぜここにいる。

吉田さんはは遺体を確認した北釜の犠牲者の名を記した

話をして吉田君の熱意は十分通じたが、きちんととした体制がとれるのかが問題だつた。私自身も半信半疑だつた。

地震が起きて何ももしないのか」と怒鳴られた。オイスカを離れていたとき、ある林業会社の社長と飲んだ。「オイスカにいたんだって」「はい」「あたるところか」。社長の度肝を抜いてやる、というのが、オイスカに戻った際の決意の一つだったという。

思いつきに対する林野庁の感触は悪くなかった。翌3月14日には簡単な企画案を林野庁東北森林管理局とオイスカ内部に出した。東北局からはその日のうちに「異存なし」の返事があつたが、問題はオイスカ内である。早々と林野局と連絡を取つたことが、すでにルール無視と言われてもしようがない。「オイスカはよくも悪くもハードルは低いし、言い出したら聞かない私の性格も知られていた。結構稼いできたので、金集めには信用があつたのかかもしれない」と吉田さんは振り返るが、それでも国内に職員120人を持つ組織だ。

話を聞いて吉田君の熱意は十分通じたが、きちんととした体制がとれるのかが問題だつた。

00人の状況を東北大大学が詳しく分析する、という記事が新聞に載った。なかにあつた「低体温症」という言葉で思い出したのが、森さんの話である。津波に襲われたとき森さんは仙台空港に避難したが、その日の夕方から水が引いてくると、周辺のがれきの中で被災者の救出活動を始めた。「助けてくれ」って声聞いたり行く。流れてきた家の断熱材なんかを巻きつけて「がんばれ」と言つても、車や物に挟まつて動けないし道具もない。どうにもならないんで被災者の救出活動を始めた。

その日の夕方から水が引いてくると、周辺のがれきの中で被災者の救出活動を始めた。「助けてくれ」って声聞いたりしていく。流れてきた家の断熱材なんかを巻きつけて「がんばれ」と言つても、車や物に挟まつて動けないし道具もない。どうにもならないんで被災者の救出活動を始めた。

